

# 『ダニエル書』—第百二十五号

預言的意義を解き明かす：ダニエル書11章40節の読み解きと現代のキリスト教への示唆

Jeff Pippenger

2024-03-09

ダニエル書11章40節は終わりの時に始まるが、この節は二つの終わりの時を示しており、したがって預言を学ぶ者は最初の終わりの時を二度目の終わりの時に対応づけることができる。この適用がなされると、1798年に始まったミラー派の歴史の線は、1989年のアメリカ合衆国の歴史と並行する。二つの線は、『黙示録』13章に登場する地の獣の真のプロテスタントの角の線と共和主義の角の線を示している。両方の線は1798年の終わりの時に始まり、1989年の終わりの時は、その節で封印が解かれて明らかにされる真理の道標を補完し、第二の証人を与えるにすぎない。

第三の天使の運動は1844年10月22日に到来したが、1856年から1863年にかけての7年間の反逆によって延期された。第三の天使の到来は2001年9月11日に繰り返された。1863年は、古代イスラエルがカデシュで最初に宿営したことと、十人の斥候の反逆によって象徴され、2001年9月11日は、古代イスラエルがカデシュで最後に宿営したことと、モーセの反逆によって象徴された。1863年の反逆は、カデシュにおける最初の反逆を表しており、それは荒野での死の裁きをもたらした。2001年9月11日の反逆は、カデシュにおける最後の反逆を表しており、それはラオデキア的アドベンティズムの指導部の死をもたらした。

1840年8月11日の天使の降臨は、1840年から1844年にかけての運動の幕開けとなり（その運動をホワイト姉妹は神の力の栄光ある顕現と呼んだ）、2001年9月11日を予表し、神の力の栄光ある顕現を指し示した。

「第三の天使のメッセージの宣言に加わる天使は、その栄光によって全地を明るく照らすであろう。ここには、世界的規模で、しかもかつてない力をもつ働きが予告されている。1840年から1844年にかけての再臨運動は、神の力の栄光ある顕現であった。第一の天使のメッセージは世界中のあらゆる宣教地に運ばれ、いくつかの国々では、16世紀の宗教改革以来どの地でも見られなかったほどの強い宗教的関心が呼び起こされた。しかし、第三の天使の最後の警告のもとでの力強い運動は、これらを上回るものとなる。」『大争闘』611頁。

1844年10月22日（最初のカデシュ）における第三の天使の最初の到来は、働きを終えるためのものだったが、神の民は新しい指導者を立ててエジプトへ引き返す道を選んだ。1863年までに、彼らはエリコの城壁を打ち倒すという神の業に加わる代わりに、「エリコを再建」してしまっていた。ゆえに、彼らは呪われ、その結果、荒野での死が定められた。

その時、ヨシュアは彼らに厳粛に誓わせて言った。「主の前に、この町エリコを建てようとして立ち上がる者は呪われよ。彼は長子をもってその基を据え、末の子をもってその門を建ててであろう。」ヨシュア記 6:26

第一のカデシュでヨシュアとカレブのメッセージを退けた古代イスラエルと同様に、現代イスラエルの第一のカデシュ（1863年）での反逆は、彼らにヨシュアの呪いを招いた。2001年9月11日（最後のカデシュ）に第三の天使が戻ったとき、神がエリコとその城壁を打ち倒すことに先立つ最終の働きが始まった。

1844年10月22日は第三の天使の到来を告げ、そうすることで、終末に間もなく訪れる日曜日の到来も告げている。1863年は、1844年10月22日に始まった第三の天使の試練の期間の終わりを画する。したがって1863年は、間もなく来る日曜法の象徴である。というのも、イエスは常に始めをもって終わりを表されるからである。1863年には、国家は二つの階級に分かれた。同様に、日曜法の時にも二つの階級が現れるだろう。

ミラー派の歴史における第三天使の試練期は1844年に始まり1863年に終わったが、その開始と終了はいずれも終末の日曜法を指し示していた。開始（1844年）と終了（1863年）の間の歴史には、ミラー派運動の反逆（1856年）がある。したがって、この期間は「真理」の刻印を帯びている。2001年9月11日の二度目のカデシュへの帰還は、第三天使の試練の過程の開始を示しており、それは1863年に型として示されたように、まもなく到来する日曜法において終結する。

その日曜法から人類の恩恵期間が閉じるまで、その歴史において象徴されているバビロンの大淫婦に対する執行の裁きに一致して、エリコとその城壁は打ち倒される。四十節は1798年に始まり、四十一節における間もなく来る日曜法で結ばれる。1798年の終わりの時は、神の教会の内的な流れを表し、第一の天使の運動のミラー派に始まり、第三の天使の運動と十四万四千人に至るまでを示している。すべてが一つの節の中にある。

1798年に南の王の台頭をもって始まった北の王と南の王の間の戦争は、1989年に、聖書の預言における第五と第六の王国の同盟によって南の王が敗北したときに終結した。1798年に始まった北の王と南の王の戦争は、ミラー派によってローマに対する戦いとして認識され、彼らはローマを、異教主義と教皇主義という二つの荒廃をもたらす勢力にすぎないものと見なしていた。1989年に戦争が終わったときには、三つの荒廃をもたらす勢力すべてが関与しており、そしてそれは、これら三つの勢力が世界をハルマゲドンへと導いていくことの預言的な描写の始まりを画した。これは、ダニエル書11章45節において地理的に表されている。

40節から45節は、海と栄光ある聖なる山の間で教皇に終わりをもたらす三つの勢力の預言的な力学を明らかにしている。正しく理解すれば、41節に示されている預言的な歴史は、41節から44節を含んでいる。

したがって、1989年の終わりの時から出発し、1798年という第二の証拠によって南の王と北の王の間の戦いの始まりと終わりを特定すると、41節から44節は致命的な傷が癒やされた教皇権の三重の連合を示し、45節はそれが終わりに至る箇所である。この観点からこれらの節に臨むと、黙示録における七つの封印と七つの教会の関係にも表されているように、神の教会の外部にある歴史が提示されている。

1798によって示される預言史の流れは主として調査審判を表し、1989年における同じ地点から始まる流れは主として執行審判を表す。1798年は主として契約の使者のために道を

備える使者の働きを強調し、1989年は主としてエリヤの使者の働きを強調している。

ダニエル書の封印が解かれた1798年以来、預言の歴史に関する知識は増し加えられてきており、その預言の歴史において、キリストはご自分の民を、神性と人性の永続的な結合を成し遂げる契約関係へと導いておられる。その終末の契約は、聖書の中で繰り返し示されている。

見よ、日が来る、と主は言われる。そのとき、わたしはイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を結ぶ。それは、わたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出した日に、彼らの先祖と結んだ契約とは異なる。彼らはわたしの契約を破った。わたしは彼らの夫であったのに、と主は言われる。しかし、これが、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約である。その日々の後に、と主は言われる、わたしはわたしの律法を彼らの内に置き、彼らの心にそれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。彼らはもはや、だれも自分の隣人に、まただれも自分の兄弟に、「主を知れ」と言って教えることはない。小さい者から大いなる者に至るまで、彼らは皆わたしを知るからだ、と主は言われる。わたしは彼らの不義を赦し、彼らの罪をもはや思い起こさないからである。エレミヤ書 31:31-34

すべての預言者は「終わりの日々」を指し示しており、預言における「終わりの日々」という表現は裁きの期間を表している。第一の天使は1798年、終わりの時に到来し、1844年に裁きが開かれることを告げ知らせたが、それは同時に「終わりの日々」の到来でもある。「終わりの日々」とは、エレミヤの「日が来る」ことであり、神がご自分の民の「不義を赦し」、その罪を「もはや思い出さない」時である。その働きは、「終わりの日々」において、反型の大贖罪日における大祭司としてのキリストによって成し遂げられる。

もしミラー派アドベンチズムが、1844年10月22日に到来した第三天使の前進する光のうちを信仰によって歩み続けていたなら、彼らはすでにイエスと共に永遠の住まいにいたであろう。これは、エレミヤが「その日々の後に」と言うときの意味である。「その日々」とは、1844年に至り、そこで完結した預言的期間のことである。それらは、ダニエル書12章が言及している「日々」である。

しかし、あなたは終わりが来るまで自分の道を行きなさい。あなたは憩い、やがて日々の終わりには、あなたに定められた分に立つことになる。ダニエル12:13

「終わりの日」に、あるいはエレミヤの言う「その日以後に」、キリストはご自分の民の内なる部分にご自分の律法を置き、その心にご自分の律法を書き記すことを定められた。内なる部分とは低位の本性、すなわちパウロの言う「肉」であり、心とは高位の本性である。契約は、回心のときに民に新しい思いを与え、再臨のときに新しいからだを与えると約束している。人は、神のかたちに、そして高い本性と低い本性をもって造られたアダムとともに墮落した。キリストの契約は、その二重の本性をもつ人類を罪の呪いから贖い出すことにある。

この地の歴史の終末に、神は戒めを守るご自分の民との契約を新たにされる。「その日、わたしは野の獣、空の鳥、地を這うものと彼らのために契約を結ぶ。わたしは弓と剣と戦いをこの地から絶ち、彼らを安らかに住ませる。わたしはあなたを永遠にわたしに婚約させる。まことに、義と公正と慈しみと憐れみによって、あなたをわた

しに婚約させる。さらに、真実をもって、あなたをわたしに婚約させる。あなたは主を知るようになる。」

「その日にはこうなる。『わたしは応える』と主は言われる。『わたしは天に応え、天は地に応える。地は穀物とぶどう酒と油に応え、それらはイズレエルに応える。わたしは彼女を地に、わがために蒔く。あわれみを受けなかった者を、わたしはあわれむ。わたしの民ではなかった者に『あなたはわたしの民だ』と言ひ、彼らは『あなたはわたしの神です』と言う。』ホセア書 2:14-23。」

「その日には、…イスラエルの残りの者、またヤコブの家から逃れた者は、…まことをもってイスラエルの聖なる方である主に寄り頼む。」イザヤ書10:20。『あらゆる国民、部族、言語、民』から、『神を恐れ、彼に栄光を帰せよ。彼の裁きの時が来たからである』というこのメッセージに喜んで応答する者たちが現れる。彼らは、この地に彼らを縛りつけるあらゆる偶像から離れ、『天と地と海と水の源を造られた方を礼拝する』ようになる。彼らは一切のしがらみから自らを解き放ち、神のあわれみの証として世の前に立つ。神のすべての御命令に従ひ、彼らは『神の戒めを守り、イエスへの信仰を保つ者たち』として、天使たちにも人々にも認められる。黙示録14:6-7、12。

「見よ、その日が来る、と主は言われる。耕す者が刈り取る者を追い越し、ぶどうを踏む者が種をまく者を追い越す。山々は甘いぶどう酒を滴らせ、すべての丘は溶け流れる。わたしはイスラエルのわが民の捕らわれ人を帰らせ、彼らは荒れ果てた町々を建てて、そこに住む。彼らはぶどう畑を植え、そのぶどう酒を飲み、また園を造って、その実を食べる。わたしは彼らをその地に植え付け、わたしが彼らに与えたその地から、もはや引き抜かれることはない、とあなたの神、主は言われる。アモス書 9:13-15。」レビュー・アンド・ヘラルド、1914年2月26日。

「その日々の後に」とエレミヤが言うとき、キリストがご自分の神殿を清めるために突然来られることによって表される働きに先立つ「日々」とは、1798年と1844年に終わった予言的な期間のことである。これらの予言的な日（期間）の終わりが、キリストがミラ一派の神殿を築き上げた四十六年間を画した。そして1844年10月22日に彼が突然来られたとき、彼はマラキ書3章を成就しておられたが、これはまた、彼がその宣教の初めと終わりに神殿を清められたときにも成就されたのである。

世の買う者や売る者を神殿から一掃して清められたとき、イエスは、罪のけがれ——魂を墮落させる地上的な欲望、利己的な情欲、悪しき習慣——から心を清めるというご自身の使命を宣言された。マラキ書3章1-3節が引用されている。『The Desire of Ages』161頁。

そして「その日々の後に」、キリストはご自身が建てた神殿を清めようとしておられたが、それは、罪の汚れからご自分の民の心を清めるという御業、すなわちエレミヤの言うように、ご自身の律法をご自分の民の心と内なる部分に書き記すことを表していた。

彼らを買めて、こう言われる。「見よ、その日が来る、と主は言われる。わたしはイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を結ぶ。それは、わたしが彼らの手を取ってエジプトの地から導き出した日に彼らの父祖と結んだ契約のようではない。彼らがわた

しの契約にとどまらなかったため、わたしも彼らを顧みなかった、と主は言われる。その日々の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。わたしはわたしの律法を彼らの思いに置き、彼らの心にそれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」ヘブル人への手紙 8:8-10。

「その日々」という語は、1798年と1844年に終わりを迎えたダニエルの「日々の終わり」を指していた。ダニエル書11章40節において1798年に始まるプロテスタントの角の流れは、十四万四千人と結ばれる契約関係を強調している。ヘブライ語の「lot」は、人の運命を定めるために用いられた小石を意味する。ダニエルは、「日々の終わり」まで去って休め（死のうちに）と告げられたが、それは1844年に裁きが始まり、彼の運命が定められる時である。

しかし、あなたは終わりが来るまで自分の道を行きなさい。あなたは怠い、やがて日々の終わりには、あなたに定められた分に立つことになる。ダニエル12:13

「終わりの日々」の「日々」とは、1844年に終結した期間に関する預言を指している。というのも、その後は期間を伴う預言はもはや存在しないからである。二千三百年、すなわち「marahの幻」（キリストがその聖所に突然現れることを意味する）はその時に終わり、さらに最後の忿怒の二千五百二十年も、1798年の「終わりの時」に第一の忿怒の日々が終わっていたのと同様に、終わった。「その日々の後に」とエレミヤが言及したことは、その後パウロによって取り上げられた。パウロはエレミヤの「その日々の後に」に二度言及している。というのも、パウロは単に「その日々の後に」制定されるべき契約について述べているのではなく、さらに重要なことに、キリストの大祭司としての働きを明らかにしているからである。

というのも、ただ一つのささげ物によって、彼は聖とされている者たちを永遠に完全な者とされた。このことについて、聖霊もまた私たちに証ししておられる。すなわち、前にこう言われたからである。『これらの日の後、わたしが彼らと結ぶ契約はこれである、と主は言われる。わたしはわたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いにそれを書きつける。わたしはもはや彼らの罪と不法を思い出さない。』さて、これらが赦されているところでは、もはや罪のためのささげ物はない。こういうわけで、兄弟たちよ、私たちはイエスの血によって至聖所に入る大胆さを持っている。すなわち、彼が私たちのために、垂れ幕、すなわちご自分の肉を通して、新しく生ける道を開いてくださったのであり、また、神の家をつかさどる大祭司を持っているのだから。ヘブル人への手紙 10:14-21

キリストの出現のmarahの幻視の預言と、預言的歴史のchazonの幻視の二千五百二十年の預言とを結びつける二百二十年は、人性と神性の結合を表す象徴的な連結によって、それら二つの預言期間の始まりを結び合わせるものであり、それは、第三の天使の運動の間に起こる清めの中でキリストが成し遂げる業で、最終的にキリストが十四万四千と結ぶ契約へと結実する。

神殿が踏みにじられることを示す chazon の幻は、エデンの園でのアダムの反逆以来、罪によって踏みにじられてきた人類の姿を示している。また、神殿を回復し清めるキリストの働きを示す marah

の幻とともに、これら二つの幻はいずれも1844年10月22日に成就した。神の忿怒を表す二つの2520年の預言があり、それは軍勢と聖所が踏みにじられることを表している。

それら二つの預言は、人類が踏みにじられることを表しており、それは marah の幻によって回復されるべきものだ。神がご自分の民に対するその二つの御怒りは、墮落した人類に対する御怒りを表しており、荒廃した神殿を建て直し清めるキリストの御業によってのみ、救い出され回復されることになる。

二つの「憤り」は、人類の高次の本性と低次の本性を表している。アダムの墮落のとき、低次の本性が高次の本性に対して優位を占めるようになったが、キリストが人間に意図したのは、高次の本性が低次の本性を支配することだった。アダムの墮落において、高次の本性は低次の本性の情欲に屈し、神の計画は逆転した。これが、聖書的な「回心」が意味するところである。回心するとは、高次の本性が低次の本性の上にある支配的地位に回復されることを意味する。回心とは、逆転すること、すなわちひっくり返すことである。

北の王国に対する最初の憤りは、墮落のときに高い本性を従わせた下なる本性に対する憤りであった。その憤りが先行したのは、キリストが贖いのみわざをその起点から始められたからであり、その起点とは下なる本性の欲望、すなわち食欲であった。キリストは四十日の断食からそのみわざを始められた。

「キリストは、救いの計画を成功裏に進めるためには、破滅が始まったまさにその場所で人を贖う業を開始しなければならないことを知っておられた。アダムは食欲の放縱によって墮落した。神の律法に従う義務を人に銘記させるために、キリストは人間の身体的習慣を改革することから贖いの働きを始められた。徳の衰退と人類の退廃は、主としてゆがめられた食欲の放縱に起因する。」『証言』第3巻、486ページ。

第二の憤りは、エルサレムのある南王国（エルサレムは神が御名を置くために選ばれた都である）によって表される、より高貴な本性に対するものであった。1844年10月22日、キリストが行おうとされた働き、そして今まさに成し遂げておられる働きは、エゼキエルの二本の棒によって表されている。

エゼキエルの二本の杖が永遠に一本に結び合わされるとき、それは、キリストがご自分の民から罪を永遠に取り除かれる契約を指し示しており、高次と低次の本性が正しい序列に戻され、人は再び全き者となる。未回心の状態では、第一の憤りに象徴される人間の低次の本性が、最後の憤りに象徴される高次の本性を支配していた。したがって、第一の憤りは北王国に向けられていた。北王国は地理的に南王国の「上」にあったからである。

marah と chazon の二つの幻を、神性と人性におけるそれぞれの始まりと結びつける二百二十年は、キリストが十四万四千人とともに第三の天使の働きを完了するとき、一本の杖へと合一する。それは、1844年の現れに関する預言と結び合わされている、南王国に対する最後の憤りの預言である。というのも、契約は回心のときに新しい心を与えるが、新しい体（北王国）は、再臨のときに一瞬のうちにのみ回復されるからである。

ダニエル書11章40節は、二つの「終わりの時」を示し、そのことによって、黙示録13章の地の獣の歴史の期間における予言史の内的・外的な筋を強調している。その節で封印が解かれる真理は、キリストがご自分の民のうちで明らかにし成就するために来られた、

内的小および外的小な真理の双方を表している。人間性が神性と結び合わされると罪を犯さないという真理は、知識の封印が解かれることの効果に結びついた光のうちに表され、終わりの時代における神の民の内的小真理を表す。世界をハルマゲドンへと導く諸権力間の戦いによって表される光は、終わりの時代における神の民の外的小真理である。

次回の記事でこの研究を続けます。

主の言葉が再び私に臨んだ。こう言われた。さらに、人の子よ、あなたは一本の棒を取り、その上に「ユダのため、またその仲間であるイスラエルの子らのため」と書け。次に、もう一本の棒を取り、その上に「ヨセフのため、すなわちエフライムの棒、またその仲間であるイスラエルの全家のため」と書け。そして、それらを互いに合わせて一つの棒とせよ。あなたの手のうちでそれらは一つとなる。あなたの民の子らがあなたに、「これらであなたは何を意味しているのか、私たちに示してくれないか」と言っているとき、彼らに言え、「主なる神はこう言われる。見よ、わたしはエフライムの手にあるヨセフの棒と、その仲間であるイスラエルの諸部族を取り、それらを彼と、すなわちユダの棒と共に置き、これらを一つの棒とする。彼らはわたしの手のうちで一つとなる。あなたが書いたその棒は、彼らの目の前であなたの手のうちにあるであろう」。さらに彼らに言え、「主なる神はこう言われる。見よ、わたしは、彼らが行った先の異邦の民の中からイスラエルの子らを取り、四方から彼らを集め、彼らの自分の地へ連れ戻す。わたしはイスラエルの山々の地で彼らを一つの国とし、一人の王が彼らすべての王となる。彼らはもはや二つの国ともならず、二つの王国に分けられることも、もはや決してない。彼らはもはや偶像によっても、その忌むべきものによっても、いかなる背きによっても、自らを汚すことはない。わたしは、彼らが罪を犯したすべての住まいから彼らを救い出し、彼らを清める。こうして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。わたしのしもべダビデが彼らの上に王となり、彼らは皆一人の牧者を持つ。彼らはまた、わたしの裁きに歩み、わたしの掟を守ってそれを行う。彼らは、わたしのしもべヤコブに与え、あなたがたの父祖が住んだその地に住み、彼らも、その子らも、その子らの子らも、とこしえにそこに住む。わたしのしもべダビデは、とこしえに彼らの君となる。さらに、わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。それは彼らとの永遠の契約となる。わたしは彼らを住ませ、彼らを増やし、わたしの聖所を永遠に彼らのただ中に置く。わたしの幕屋もまた彼らと共にあり、まことに、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。わたしの聖所が永遠に彼らのただ中にあるとき、主であるわたしがイスラエルを聖別することを、異邦の民は知るであろう」。エゼキエル書 37:15-28。